

令和八年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「
「かっこ」なども一字と数えます。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。本文の上にある数字は行数を表します。

5 小学校三年生のころ、同級生の家に遊びに行った。その子の家は当時住んでいた横浜の住宅街でちいさな商店を①営んでいた。いまではチェーン店の進出でほとんどなくなってしまうた、自動販売機に毛が生えたようなのかな商店。ちようどお店が休みの日だったのだと思う。シャッターを閉めた薄暗いガレージで、その子のお父さんがクルミを割っていた。クルミ割り器というものを見たのは、それが初めてだった。おじさんはペンチのようなものに殻つきのクルミを挟んで、カタン、また挟んで、カタン、と割っていく。クルミはびっくりするほどたくさんあった。おじさんは私を見て「おっ、その友達、クルミ好きか」と訊く。とくに嫌いではないので頷くと、「そうか、食べなさい食べなさい。まだまだ、いくらでも割るからな」と喜んでごちそうしてくれた。そして「クルミが好きな人に悪い人はいない！」と言って笑った。割りたてのクルミはくたつとやわらかくて甘くて、おいしい。それからもおじさんは私が遊びに行くと、お店が忙しそうなときでもこちらを振り返って、「おっ、クルミの好きな子だね」と、仲間を見つけたみたい嬉しそうに顔をしてくれるのだった。私はそのことに、なんだかものすごい衝撃を受けた。世のなかには、私という人をまったく知らないのに、クルミというちいさな食べものだけを理由に自分をこんなに思いきり肯定してくれる人がいるのか。じゃあもし「好きじゃない」と言ったらどうなっていたんだろう。悲しそうな顔をしただろうか。がっかりして、私を仲間だとは思ってくれなくなっていたんだろうか。

10 5
そのころ——十歳くらいのとき、ほとんどの物事に「いい」「悪い」という価値観がついてまわることを知り、それが面白くなった時期があった。人を傷つけるのは悪いこと。じつくり考えるのはいいこと。草木を大切にするのはきつといいこと。もしも、地面に流したらずっと木の根っこが苦しむような毒を撒いたら……それはたぶん、すごく悪いこと。いいとか悪いとかとは別に、「好きなこと」もある。そのとき私が住んでいた町は昔は海で、ちいさな貝の化石がたくさん出る地層があつて、たまたま当時おとなりに住んでいた友達のお父さんが地質学の先生だったから、一緒にその地層から化石を洗いだす作業をした。じーっと見てようやく貝だとわかるような大昔の貝をひとつひとつピンセットでつまんで標本を作っていく。昔のことをこうやって丁寧に調べるのは、たぶんいいこと。

15 クルミの話に驚いたのは、ちようどそんな時期だったからなのだろう。だって、私がクルミを好きなことで誰かにいいことをしてとは思えないし、逆に誰かを傷つけるとも思えない。食べただけじゃ歴史を解き明かすような発見もない。クルミ好きな人にはほんとうに悪い人がいない

のかどうか……自信がない。でもあの子のお父さんは、心から嬉しそうな顔をしていた。いま思えばなにか理由があったのかもしれない。クルミ農家の出身とか、好きな映画や本の影響とか……。でもあのときは、クルミを理由に自分が肯定されたのに、クルミどころではなかった。なんとも思っていなかったものをたまたま好きだと言ったことによって、自分を「いい」存在だと思ってもらえるのが不思議だった。

もう少し大きくなると、それはそんなに不思議なことじゃなくなった。本来よくも悪くもないはずのことに、いいか悪いかが、仲間かそうじゃないかの線引きを持ち出すのは、案外よくあることなのだ。同じクラスの女の子二人がなにやら盛り上がりつつあったと思ったら、私の知らない男性アイドルグループの写真を持ってきて、「ねえねえ、この人とこの人、どっちがかっこいい？」と訊く。ほとんど同じ顔に見えたけれど、「うーん、こっち？」と片方を指すと、一人が喜んで「やったー、さすがなくちゃん、わかってるねえ」と私を仲間扱いし、もう一人が「えー」と不満げな顔をする。私の中には存在しない線引きが、この二人にとっては白黒を分ける大事なものののだ。そういうことがあるたびに、(1)「ああ、これはこの人にとつてのクルミなんだな」と思うようになった。

中学生くらいのころから※レフ・トルストイを猛烈に好きになった。その理由のひとつは、トルストイを読むと、そういう線引きの良し悪しを、ひとつひとつ一緒に考えているような気持ちになれるからだだった。『復活』の冒頭はだいたいこんなふうになる——人間がどんなに自然を傷つけても、春はやっぱ春だった。植物も、鳥も、子供たちも嬉しそうだ。けれども、人間たち——もう一人前の大人たちは、自分をあざむいたり苦しめたり、互いにだましあったり苦しめあったりすることをやめなかった。大人たちにとって神聖であり大切なものは、この春の朝——平和と調和と愛ではなく、互いに他人を支配するために考え出したことなのだ。

トルストイは「いい」と「悪い」を考え続ける。もしわからなくなったら、いったんものすごく小さな単位まで分解して、もう一度考える。私は思う——トルストイが『復活』の印税を全額寄付したというドウホボル派の人たちのことはそれまで知らなかったし、トルストイの思想がどう変わっていったのかを考えるにはたくさん時間が要しただけで、でも、考えるという作業そのものが大切だというのは、わかる。

二〇〇二年、ちょうど二十歳になる冬、私はロシアのサンクトペテルブルグに留学した。まだほとんど外国に行ったことがなかった私にとっていちばん衝撃的だったのは、国名が名刺のように自分についてまわることだった。語学学校の同じクラスにはイタリア人、フランス人、ドイツ人、トルコ人がいて、私だってその子たちのことを、ドイツ人のジルケとか、フランス人のジャン・フランソワとか認識しているわけだから、あたりまえといえはあたりまえなのだけど、それまで自分にとって国というのは単なる行政単位であって、選挙権もなかった自分にとっては空気のような存在だった。空気だと思っていたものが自分についてまわるのは、なんだか(2)気が重い。

会話の授業を担当していたのはガリーナ先生という大柄おおがらの女性で、貧困や戦争や難民といった社会問題についても積極的にみんなに問いかけた。留学生たちはそのたびに自分の故郷の問題点を挙げ、批判し、どうしたらいいのか意見を出しあった。しかしとことん話をしていくと、だんだんみんな頭を抱かかえて、それぞれの故郷があまりにも多くの問題を抱えていること、歴史にすっかり向きあえていないこと、自分たち自身もまだまだ考えが足りないことなどに気づいて、暗い気持ちになっていく。そんなときガリーナ先生は必ず、「私はあなたたちを見ると、気をつけてる」とがあるの。ジャン＝フランソワが『フランス人』じゃなく、ジルケが『ドイツ人』じゃなく、ユリが『日本人』じゃないところに、その人の本質があるのがわかってるから。ここで教えてるうちに、どうしたらそれが見えるかってことを考えるようになった。私の方法は簡単。目を見て、その奥おくになが見えるか考えながら話を聞くこと。一回じゃわからなくても、なんども話をしていううちにわかってくる。そういう部分っていうのは、見ようとしないと見えてこない。みんなはそんなことはあたりまえだと思うかもしれないけど、ほら、こういう話をしていうと、つい忘れちゃうことがあるでしょう。他人はもちろん、自分もその枠わに押し込めてしまいうことになるでしょう」という話をした。私たちはハツとして、自分たちが危ないところへ入っていかうとしていたことに気づく。「気が重い」の重さの理由に気づく。枠わというのはいろいろあるけれど、なかでも国の名前っていうのはたぶん、すごく頻繁ひんぱんに使われる枠組みだからこそ、こんなに近くで毎日一緒に学んでいる友達や自分をどこかに押し込めてしまつて、そのせいでなにかが見えなくなるような、そういうものなのだ。

モスクワに移り住んだ二〇〇四年、モスクワではチェチェン紛争ぐんそうの②ヨハでテロが頻発し、その傷を怒りで返すように、ロシア国内の一部の若者の間で排他主義はいたしぎが高まっていた。自分たちの仲間を殺した「ロシア人」が乗っている地下鉄を爆破ばくはして、数十人をまとめて殺す。不可解な侵入者に見える「外国人」だから襲撃しゅうげきする。知らない人を殺したり、ナイフで刺したりする。テロや排他主義に潜ひそむ、枠組みが暴力を肯定する構造の単純さと破壊力はくわいりきの強さに、ぞっとする。

同年夏、私はモスクワの文学大学という本の虫ばかりが集まる大学に入り、その子たちのなかでもとびぬけて本の虫だったマーシャという女の子と仲良くなって、寮りようでは同じ部屋に住むようになった。三年生のころ、マーシャにバイク乗りの恋人ができた。その人はとにかくバイクが好きで、アマチュアバイク乗りの会に参加するためにヨーロッパに行くこともあるような人だった。私が初めて会ったとき、その人は私とマーシャを見て、「なんだか似てるね」と言い、「なるほどねえ」と頷うなづいた。そして、「いや、バイカーって、みんな同じ顔してるんだよ。初めて向こう（ヨーロッパ）のバイク乗りたちに会ったとき、感動したんだ。みんな俺おれみたいな顔してて。ゲルマン系だろうとラテン系だろうとアジア系だろうと、顔に『バイカー』って書いてあるんだ。俺はたぶん、どこの国に行ってもすぐバイカー仲間を見つけれらるんだって思ったら、嬉しくて

さあ。でもあれだな、たぶん本が好きなの顔つてのもあるんだな」と続けた。

バイカーの顔というのがどういう顔なのか私にはいまひとつピンとこなかったが、⁽³⁾その人が言いたいことはわかった。好きなものが同じだと顔が似てくるというのわかる。私とマーシャが似ているかどうかは一緒にすぎるせいかよくわからないけれど、本が好きなの顔というのわかる気がする。特に、読みかたとか好きな本とかが一緒だと、顔どころか性格も行動も似てくる。文学大学にいて私が寂しいと思ったことがないのは、本の世界の住人と一緒にいるからなのだろう。この人が世界中のバイク好きを見つけて喜んでいいるのと同じように、私は本好きの集団に囲まれているから、少しくらいいたいへんことがあっても、心の底の部分はいつも幸せな気持ちでいいるのだろう。

二〇一四年のクリミア併合以降にロシアとウクライナのあいだで起きた[※]軋轢は、ロシアとウクライナの多くの人々の関係をめちやくちやに壊していった。たんに国籍や住む地域によってだけではなく、その問題にかんする考えかたの違いだけで、家族や友達や仕事仲間として親しかった人同士の関係が、目の前で次々に崩れていく。文学に携わる人々も、それに無縁ではいられなかった。二〇一四年の秋、私はモスクワでひらかれた翻訳者会議に参加していた。世界中からロシア文学の翻訳者や出版エージェントが集まり、ロシアの作家や研究者も呼んで、発表や講演を通じて交流する貴重な会だった。この年はクリミア併合に異議を申したる署名運動の呼びかけから始まり、セッションや質疑応答でも時事的な問題に触発された論議が盛んにおこなわれた。その大半は翻訳者にとっても切実な課題で、有意義な議論も数多くあった。けれどもそういった問題になると必ず、「この作家はウクライナの作家でありロシアの作家ではない」とか、「クリミアはロシアのものかウクライナのものか」といった話に引っぱられる人が出てきて、そこで突きつけられる奇妙な白黒の世界に参加者たちがしばしば呆然としてしまう、という瞬間が幾度もあった。このときの訪露で自宅に招いてくれたウリツカヤの言葉に、私は救われた——「国や政府とは、その行政単位に暮らす人々や、その国にかかわる人の人権を守るために存在する最低限の必要悪であるべき」だと。私たちは必要悪に毒されてはいけない。私はこの数年、この言葉を繰り返し思いだしていた。

二〇二二年二月二十四日。△△軍が□□を侵攻。死者、難民、新たに生まれる憎悪と復讐心。誰もが望まない最悪の展開に、私たちは言葉を失くす。心なんてものじゃない、体が痛い。けれども伝えなくてはいけないことは山のようにある。開戦翌日のブイコフの反戦表明を翻訳し、ウクライナ人の母とロシア人の父を持つミハイル・シーキンが二〇一四年から語り続けていた言葉を掘り出し、新たに送ってくれた文章を翻訳する。ロシアとウクライナの友人たちの悲痛な声や、「ロシア政府に俺たちの代弁をさせるな」と反戦の声をあげるグルボフスキーの言葉や、ヘッセがナチズムからドイツ語を守ったように「戦争から言葉を守る」ことを訴えるゲニスの言葉を翻訳し、憲法と人権の大切さを^③説き続ける政治学者

エカテリーナ・シユリマンの講演を訳出する（いずれも※noteで公開中、タイトルは「戦争という完全な悪に※対峙する」「ウクライナとロシアの未来」「無数の橋をかけなおす」「戦禍に社会科学はなにができるか」）。

そうして一カ月、絶え間なく続いた翻訳の緊張の連続が途切れたとき、私はふとあのクルミのことを思いだし、続けてバイク好きのあの人を思いだした。(4) 不思議な連想に、「あれ？」と思う。この、希望のようなものはないだろう。

80 クルミが好きだと言った私を仲間だと思ってくれたあの子のお父さんは、いまもクルミ好きな人を見つけたら喜んでクルミをふるまっているだろうか。ああ、そうだとい。もしあのときの薄暗いガレージに、子供のころの私とロシアの友達とウクライナの友達に来て、やっぱり「おつ、その友達、クルミ好きか」と訊いてくれたらいい。クルミ割りの小気味いい音を聴きながら、山のようにあつたあのクルミを、私たちは黙々と食べよう。カタン、カタンとおじさんはクルミを割り続ける。たくさんのクルミは、私の想像のなかでどんどん増えていく。だって、チエチエンの子のぶんもアフガニスタンの子のぶんも、地球の裏側の子のぶんもなくちゃ困る。大丈夫。クルミ世界のおじさんはちいさな仲間がたくさんいるって喜んで、あのとときみたいに「いくらでも割るから」って、張り切ってくれるから。

95 クルミが好きじゃない子供のために、トマト好きのおじさんも必要だ。トマトを中心に世界が回っているトマト世界のおじさんは、畑でもいできたばかりの青い匂いのするトマトをくれる。ウクライナの子供とロシアの子供は並んでトマトにかじりつく。ついでにトマトが好物の私もこちそうになる。

100 クルミでもトマトでもなくてもいい。好きなもの、好きなことを気前よくふるまうこと、「好き」を分かちあうことを快く思う人が、その基準を(4) カッコたるものとして持っているのは、これからの世界の子供たちにとってもすごく大切なことなのだろう。その基準が国という行政単位

のしがらみに曇らないように、ものや人を愛しく守る人々の存在が。

子供が大きくなって、もしバイクが好きになったら、世界のどこにいてもあのバイク好きの人が見つけて、「同じ顔してる！」と大喜びしてくれるはずだ。そうしたらみんなでバイクに乗っているんな土地に行つて、そこでまたたくさん「同じ顔」の人を見つければいい。

105 もし本が好きになったら——私たちがその人たちを見つけて、めいっばい大切にしよう。(5) 世界中のたくさんのおじさんの本を翻訳して、朗読して、笑つたり泣いたりしよう。

※レフ・トルストイ……ロシアの文豪。代表作に『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』などがある。

※軋轢……意見の対立などが生じ、仲が悪くなること。

※note……文章や映像作品などを投稿、配信できるウェブ上のサービス。

※対峙……対立する者どうしが、にらみ合ったままじっと動かずにいること。

問一——線①④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。漢字は一画ずついいねに書くこと。

問二——線①「『ああ、これはこの人にとってのクルミなんだな』と思うようになった」とありますが、ここでの「私」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分にはどうい理解が及ばない線引きや、本心とは逆の返答であっても、仲間外れにされないようにするためには相手の言動に合わせることが重要だと痛感しており、心穏やかに過ごすとう心がけるようになっていく。

イ 自分が意識してこなかった線引きや、納得しがたい区別であっても、一般的には善悪を判断するための基準として通用している状況に直面するたびに、ものの見方が広がり成長できたと感じて喜べるようになっていく。

ウ 自分としては「悪い」と感じる物事や、無意味に思える区別であっても、相手にとっての「好き」なのであればその思いは思いとして受け止め、まずは肯定してあげることこそが優しさだと考えられるようになっていく。

エ 自分にとっては特に気にならない物事や、なくてもよさそうな区別であっても、人によっては物事の良し悪しや好き嫌いを判断する重大な基準でありうるものがしばしばあるということを理解できるようになっている。

オ 自分とは無関係な物事や、考えもしなかった線引きであっても、自分の返答次第で相手の機嫌や自分に対する評価が大きく変わることがよくあり、その経験を糧として自身の考え方も柔軟に変えられるようになっていく。

問三——線②「気が重い」とありますが、「私」が「気が重い」と感じるのはなぜだと分かりましたか。六十一字以上八十字以内で説明しなさい。

問四 — 線③「その人が言いたいこと」とありますが、どのようなことだと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえ紛争やテロといった大きな社会問題であっても、それらの解決には地道な運動から始めるしかないものであり、暴力を肯定する排他主義はどんな小さなものでも許してはならないということ。

イ たとえ別の国籍をもった二人でも、相手に興味を持つことをきっかけに恋人という関係にもなれるのであり、長い間過ごすうちに二人の顔や性格や行動までもが似てくるものだということ。

ウ たとえ何も言葉を発しなくても、相手の趣味が何であるかはだいたい見当をつけることができるものであり、それと同様に相手の国籍や民族は一目で分かるということ。

エ たとえ興味関心や趣味が違っているとしても、他者を愛せる優しい人間だということではなく互いに伝わるものであり、その思いやりを持つ人が増えていけば世界平和の実現も夢ではないということ。

オ たとえ国籍や民族が異なっているとしても、共通の物事を愛好する人はすぐにそれと分かるものであり、その物事を通じて自分はその人たちとつながっていると思えることは幸せだということ。

問五 — 線④「不思議な連想に、『あれ?』と思う」とありますが、ここでの「私」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」は、ロシアとウクライナの「最悪の展開」に打ちひしがれながらも、伝えなければならない当事者の言葉があるという使命感に駆られて翻訳作業を休みなく行っていた。そんな折、ふいに思い出された二つの過去の記憶が、敵と味方、困難と幸福、そして戦争と平和を考えるという観点で今の状況に結びつくような予感として、不確かではあるが前向きな思いを抱いている。

イ 「私」は、ロシアとウクライナの「最悪の展開」に目の前が真っ暗になり、これまで携わってきた研究活動や署名運動が水の泡になってしまったと絶望していた。そんな折、ふいに思い出された二つの過去の記憶を手掛かりに、今後の自分が取り組むべき仕事と平和実現への道筋が重なる予感として、期待とも不安ともつかない奇妙な感覚に包まれている。

ウ 「私」は、ロシアとウクライナの「最悪の展開」に恐れおののきながらも、現地に知り合いの多い留学経験者である自分にできることと

して当事者の悲痛な訴えを翻訳し続けていた。そんな折、ふいに思い出された二つの過去の記憶が、国や政府は必要悪にすぎないというアイデアと結びつく予感が出て、国籍を越えた新たな共同体を夢みるようになっていく。

エ「私」は、ロシアとウクライナの「最悪の展開」に心身とも傷だらけになりながらも、このような事態を予感して書き溜めておいた無数の現地の言葉を翻訳したものを次々と発表していた。そんな折、ふいに思い出された二つの過去の記憶によって、そもそも自分は国や政府の意向にとらわれずに生きてきたのだと納得し、晴れやかな気分を味わっている。

オ「私」は、ロシアとウクライナの「最悪の展開」に愕然とし無力感を覚え、熱心に取り組んでいた文学研究や翻訳作業にしばらく手をつけることができなくなっていた。そんな折、ふいに思い出された二つの過去の記憶が、現地の言葉を待っている人が世界中にいるのだという予感をもたらし、「私」の背中を押してくれた気がして漠然とした安心感に浸っている。

問六 本文で言及された人物とその描かれ方の説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。なお、選択肢中の数字は、本文中にその人物が最初に出てきた行数を表します。

ア クルミ好きの「おじさん」(3)と「地質学の先生」(15)は、自分の好きな物事には、相手の事情もお構いなしに巻き込んでいく積極性があるという点で、似たところのある人物として描かれている。

イ 同じクラスの「私を仲間扱い」した子(26)と「不満げな顔を」した子(26)は、自分とは好みが違う人を軽蔑し容赦なく排除しようとするという点で、似たところのある人物として描かれている。

ウ 「トルストイ」(29)と「ガリーナ先生」(42)は、線引き自体の良し悪しや、本当に大切なものについて時間をかけて考える労力を惜しまないという点で、似たところのある人物として描かれている。

エ 「マーシャ」(58)と「バイク乗りの恋人」(59)は、相手への敬意と信頼さえあれば、少しくらいの苦境もたいしたことではないと考えているという点で、似たところのある人物として描かれている。

オ 「ウリツカヤ」(78)と「ブルホフスキー」(84)は、自分自身の国籍とは無関係に、正義がどちらにあるかを自分で考えて肩入れする国を決めたという点で、似たところのある人物として描かれている。

問七——線⑤「世界中のたくさんのお本を翻訳して、朗読して、笑ったり泣いたりしよう」とありますが、ここには「私」のどのような思いが込められていると考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 外国文学を翻訳して世界中の子供たちに届ける者として、様々な事象について「いい」か「悪い」かを考えてもらうために、喜劇だけではなく悲劇にも研究の範囲を広げていこうと決意を新たにしている。

イ 慣れない異国の地で多くの人から親切にされた実体験から、感謝を忘れず、その恩返しではないが世界中の子供たちに本を好きになってもらうための研究や翻訳作業に尽力していこうと決意を新たにしている。

ウ 翻訳の仕事を通して平和と愛を希求するとともに、好きな文学を広く深く味わいながら、世界中にいる読書好きの子供たちが人間らしい幸福な生活を送ることの助けになつていこうと決意を新たにしている。

エ 文学に携わる者のはしくれとして、受け身的な朗読ではなく朗読という主体的な読み方を推進し、日常では抱きにくい感情の揺れを世界中の子供たちに経験してもらう機会を提供していこうと決意を新たにしている。

オ 平和を愛する人間の一人として、反戦運動にただ参加するだけでは満足せず、そこに集まった子供たちを笑顔にさせるために文学研究の成果を発表したり自分の作品を朗読したりしていこうと決意を新たにしている。

問八 次のア～カは、この作品を読んだ生徒たちの感想です。本文の解釈として明らかな間違いを含むものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「△△軍が□□を侵略」(81行目)と伏せ字にされている理由は、戦争はどの国にも起こりうることであり、日本も近いうちに戦争を起こしてしまうだろうという筆者の懸念を表明したかったからだと思う。

イ 「私たちは黙々と食べよう」(92行目)は、「黙々と」が直前の「小気味いい音」(92行目)と対照をなすとともに、「好き」の分かちあいの形として必ずしも言葉を介さない在りようもあると読者に感じさせる、奥行きのある表現なんじゃないかな。

ウ 「地球の裏側の子のぶんもなぐちゃ困る」(94行目)からは、ニュースなどで私たちが見聞きできる範囲だけでなく、文字通り世界中の子供たちを分け隔てなく思いやる対象にしたいという筆者の強い思いが感じられた。

エ 「トマト好きのおじさん必要だ」(96行目)は、筆者の個人的な食べ物好きが反映された茶目つ気のある表現でもあり、誰もが「好き」を共有できる相手を見つけれられるというメッセージであるとも考えられる。

オ 「大喜び」(102行目)は「喜んで」(95行目)よりも強調された表現であることから、共通の「好き」でつながる世界があるとはいえず、それぞれの世界の間には温度差があるということを暗に示しているように思えた。

カ この文章は、現実起こったことやそのつと考えたことが時系列順に書かれてあるから読みやすい。終盤^{しゅうばん}では、これまでに書かれてきた別々のエピソードがひとつにつながった感じがして、胸にこみあげてくるものがあったよ。

二
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

むきだしの能力主義は、勝者とされる人にとつてもやさしいものではない。サンデルは次のような問題を指摘している。受験戦争を突破してハーバードに入学してもそれで終わりではない。「能力の戦場で勝利を収める者は、勝ち誇ってはいえるものの、傷だらけだ。それは私の教え子たちにも言える。まるでサーカスの輪くぐりのように、目の前の目標に必死で挑む① シュウセイは、なかなか変えられない。多くの学生がいまだに競争に駆り立てられていると感じる。そのせいで、自分が何者であるか、大切にされる価値があるのは何かについて思索し、探求し、批判的に考察する時間として学生時代を利用する気になれない」。

彼らは社会に出ても、終わりのなき能力主義のレースを生きるのだろう。というより、そう規律② クンレンされたのだから挑みつづけるほかはない。③ シンコクなダメージを受けて途中退場する者もいる。そして傷を負いつつ生き延び、多大な金銭や名声を獲得できたとして、はたしてそれが充実した生き方だといえるだろうか。

たとえトップエリートではなくても、似たようなプレッシャーや生きづらさを感じる人は少なくない。平坦な戦場で生き延びることもたやすくはない。日々の生活に追われ、「自分が何者であるか、大切にされる価値があるのは何かについて思索し、探求し、批判的に考察する時間」を、誰もが奪われがちである。

④ この問題にかんする※示唆的な物語として、ミヒヤエル・エンデの『モモ』がある。主人公のモモは人の話を聞くのが上手な女の子で、彼女と話をすると誰もが充実した気持ちになれる。「ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいないものです。そしてこのてんでモモは、それこそほかにはいないすばらしい才能をもっていたのです」。

だが次第に人がやって来なくなる。それは「灰色の男たち」のせいだった。彼らは「無駄な時間を預けてくれれば高額の⑤ 利子をつける」とそのかして、人びとの余暇を回収していたのだ。そして何かがおかしくなっていく。

時間貯蓄銀行を利用した者は、たしかにお金こそ増えるが、次第に不機嫌で怒りやすくなる。「時間をケチケチすることで、ほんとうはぜんぜんべつのかをケチケチしているということには、だれひとり気がついていないようでした。じぶんたちの生活が日ごとにますますなり、日ごとに画一的になり、日ごとに冷たくなっていることを、だれひとりみとめようとはしませんでした」。さらには街並みまでが無機質で⑥ 画一的で

貧しくなつてゆく。

灰色の男たちの正体は「時間どろぼう」だった。銀行を利用しはじめた人たちは、変だと思いつつも、時間の節約をやめることはできない。だがモモは違った。彼女は何でもよいような時間の大切さを知っているからだ。こうしてモモは時間どろぼうと対決することになる。『モモ』は児童文学だが、時間どろぼうに象徴されるテーマは、寓話と理屈の両側面をかねそなえ、大人にも響きやすいものとなっている。本国のドイツに次ぐ人気が日本ではあるといわれるが、たしかに両国の時間貯蓄銀行の業績はよいのかもしれない。もっとも睡眠時間は日本が有意に短い。物語の後半、モモは「時間の国」で※マイスター・ホラと問答を交わす。ホラによれば、時間を感じとるためには心がなければならぬ。逆にいえば、心が時間を感じとらなくなってしまうと、その時間はないも同然である。おだやかな時間が流れるなかでホラはモモにやさしく諭す。

人間はひとりひとりがそれぞれじぶんの時間をもっている。そしてこの時間は、ほんとうにじぶんのものであるあいだだけ、生きた時間といわれるのだよ。……人間はじぶんの時間をどうするかは、じぶんできめなくてはならないからだ。だから時間をぬすまれないように守る。とだって、じぶんでやらなくてはいけない。

能力主義や競争がすべてまちがっているわけではないし、何かを達成するためには多くの時間をかける必要もあるだろう。だがそれは、本当に自分にとって価値あるもののために使われているのだろうか。そこかしこに溢れる灰色の男たちの※甘言から免れる術を私たちは学ばねばならない。モモの導き手たるカメの※カシオペアが知っているように——「オソイホド ハヤイ」。

※絶望死や時間どろぼうの話から導かれるのは、いまの社会が特定の評価基準や生き方を前提としているのではないか、という問題の所在である。学歴のような資格をもたない者が切り捨てられやすい一方、もてる者も過酷なレースを強いられつづける。アウトサイダーとインサイダーの違いはあるが、⁽⁴⁾両者はいわば特定の価値観へと等しく疎外されている。

※これまでみてきたように、財産所有のデモクラシーは、少数のグループが政治権力や経済権力を支配するのを防ぐとしてきた。これらに加えて、いま生じているのは、評価上の支配状態というべき事態である。今日のそれは、特定の価値や生き方のみが評価される、一元的な能力主義の支配といえるかもしれない。

さらに幻滅させられるのは、競争の勝者である巨大な権力をもつ人びと、あるいはセレブや著名人の生活が必ずしも羨ましく思えないことだ。
「※酸っぱい葡萄」だといわれるならそれまでだが、成功者は実際どこか空虚な思いを抱えているのではないか。『モモ』のマイスター・ホラはこう警告している。

はじめのうちは気のつかないけど、ある日きゅうに、なにもする気がしなくなってしまう。なにについても関心がなくなり、なにをしてもおもしろくない。この無気力はそのうちに消えるどころか、すこしずつはげしくなっていく。……なにもかも灰色で、どうでもよくなり、世のなかはずっかりとおのいてしまつて、じぶんとはなんのかかわりもないと思えてくる。

「ここまで心が冷え切ってしまうと、⁽⁵⁾時間貯蓄銀行の利用者は灰色の男そのものになってしまう。」「この病氣の名前はね、致死性退屈症^{しやくしやうたいくしやうしやう}というのだ」。一元化された能力主義の社会においては、敗者は絶望という名の、勝者は退屈という名の死に至る病を患^ういやすい。それは⁽⁶⁾誰もが貪^あしい時間を生きる世界である。

それゆえこの事態に対抗^{たいかう}するためには、価値や評価の基準を意識的に多元化する必要がある。それはまた、社会が安定して存続するためにも重要である。絶望や退屈に見舞^まわれた人びとは、みずからの人生に投げやりになるのみならず、この世界が未来へとつづいていくことも真剣^{しんけん}に受けとめなくなるだろう。

ロールズは、財産所有のデモクラシーが次の条件を満たすべきだとしている。「政治的正義の構想は、熱心な支持を得ることのできる複数の生き方のためのいわば充分な空間 (sufficient space) をそれ自身のうちに含^{ふく}んでいなければならない。それができないならば、この構想は支持を欠き不安定なものとなるだろう」。

特定の評価や生き方だけではなく多種多様なそれらが承認されていること。これを複数性^{ふくすうせい}の擁護^{ようご}とよびたい。ロールズの用語でいえば、それは、できるだけ多くの価値観 (善の構想) が認められうる社会、あるいはすべての人が自尊心 (自尊) をもちうる社会のことである。

この意味での自尊^{じそん}心とは、①何か自分にとって重要な生きがいがあり、②それを実際に追求することを実感できる、そのような場合に可能となる、きわめて重要な道徳感情のことである。自尊を奪われてしまうと、最悪の場合、死に至る絶望や退屈を招いてしまう。そこまでゆかずとも、人生はつらくむなしなものとなる。

もちろん感情を直接分配することはできない。だが「自尊を抱くことを可能にする社会的基盤」を整備することはできるし、政府の役割であるべきである。

(田中将人『平等とは何か 運、格差、能力主義を問いなおす』)

※示唆的……それとなくほのめかしたり、暗示したりすること。

※寓話……教訓や風刺を比喩によって伝えることを目的とした物語。

※マイスター・ホラ……『モモ』に登場する老人。時間をつかさどる。灰色の男たちに追われるモモを保護した。

※甘言……人の気に入るような、口先だけのうまい言葉。

※カシオペア……『モモ』に登場するカメ。時間の流れの外にいる。モモをマイスター・ホラのもとへ案内した。

※絶望死……筆者は本文以前に、「絶望死」について述べている。

※これまでみてきたように……筆者は本文以前に、「財産所有のデモクラシー」について述べている。「財産所有のデモクラシー」とは、民主主義の理念を経済にも拡張することで、国民が資産や経済的機会を公平に所有できるようにしようという考え方。

※酸っぱい葡萄……負け惜しみのたとえ。

問一——線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直さない。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線①「この問題」とありますが、過度の能力主義においてどのようなことが問題となっていると筆者は考えていますか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問三——線(2)「画一的で貧しくなつてゆく」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時間貯蓄銀行を利用した人々が金銭的な余裕を失つてしまい、街並みもそれに応じて質素な生活様式で統一されたものになってしまふから。

イ 時間貯蓄銀行を利用した人々が今の生活へのこだわりを失い、街並みもそれに応じて手入れが行き届かずに汚れたものになってしまふから。

ウ 時間貯蓄銀行を利用した人々が効率を優先するようになり、街並みもそれに応じてあらゆる無駄を省いた個性のないものになってしまふから。

エ 時間貯蓄銀行を利用した人々が見た目を気にするようになり、街並みもそれに応じて綺麗な住居が立ち並ぶだけの温かみのないものになってしまふから。

オ 時間貯蓄銀行を利用した人々がささいなことで怒りやすくなり、街並みもそれに応じて荒廃し危険な雰囲気が漂うものになってしまふから。

問四——線(3)「たしかに両国の時間貯蓄銀行の業績はよいのかもしれない」とありますが、この表現からは筆者のどのような意図が読み取れますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ドイツや日本では、『モモ』に対する文学的評価が非常に高く、その背景には、慌ただしい日々を追われる両国の人々の、時間を受け渡せるシステムに対する憧れがあるのだらうと推論し、読者にその是非を問うている。

イ ドイツや日本では、二十世紀に金融業を進展させることで近代化の流れに乗ってきたが、そのことがかえって二十一世紀に入ってから銀行以外の産業の衰退を招いてしまったとして、読者の同情を買っている。

ウ ドイツや日本の人々は、長時間の労働に耐える我慢強さを持ち、貯蓄を増やして国力の向上に貢献してきたが、心身の健康を害することが多くなっており、そのような働き方には限界があるのではないか、という懸念を表明している。

エ ドイツや日本の人々は、その勤勉さにより時間の節制に励み、自国の経済的な発展を支えてきたといえるが、その一方で充実した生き

方をすることが難しくなっているのではないか、という皮肉を込めている。

オ ドイツや日本の人々は、時間の節制に追われ充実した生活を手に入れることが難しくなっているので、無駄な時間を許さない能力主義の風潮や時間貯蓄銀行の仕組みから抜け出すために純粋な子供たちの力を借りよう、と提案している。

問五 — 線(4)「両者はいわば特定の価値観へと等しく疎外されている」とありますが、それはどういふことですか。最もふさわしいものを次の

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 競争を勝ち抜くのに有利な条件を持っている者は目先の勝敗に気を取られるようになり、そうでない者は目の前の勝負に早々に見切りをつけるが、どちらも、勝利至上主義の価値観で物事を見ることをやめられないでいるということ。

イ 競争を勝ち抜くのに有利な条件を持っている者は激しい競争の渦中に身を置き続けなければならず、そうでない者は社会から除け者にされるが、どちらも、能力主義を絶対の基準として社会から押し付けられ、そこから逃れることができずにいるということ。

ウ 競争を勝ち抜くのに有利な条件を持っている者は厳しい勝負の世界に身を置き続けることで疲弊し、そうでない者は途中で勝負から身を引かざるを得なくなっているが、どちらも、勝敗を分ける要因が何であるかを知らないでいるということ。

エ 競争を勝ち抜くのに有利な条件を持っている者は結果こそがすべてだとされる世界に嫌気がさし、そうでない者は競争に高い価値を置いてますます努力するが、どちらも、競争に参加すらない人間を仲間外れにするようになっていくということ。

オ 競争を勝ち抜くのに有利な条件を持っている者は負けることを極度に恐れ、そうでない者は負けた原因を明らかにしようとするこだわりを持ち続けているが、どちらも、他者の勝敗についてまで意見するようになっていくということ。

問六——線(5)「時間貯蓄銀行の利用者は灰色の男そのものになってしまふ」とありますが、それはどういうことだと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時間の節約に成功した者が、不要なものを排除しようとするあまり大切なものまで失い、空虚な思いにとらわれ、自分が生きる世界や他者への興味関心が無くなった結果、他者の時間までも貧しいものになってしまうようになるということ。

イ 時間の節約に成功した者が、不要な時間を切り捨てようと試みるなかで、退屈さを解消するためには、時に他者とかかわる時間をもつことが必要であると気付き、他者の時間を奪って自分とともに過ごすようになるということ。

ウ 時間の節約に成功した者が、他者よりも充実した人生を送るのに必要なお金を得るために忙しく働くが、働くという手段がいつのまにか目的にすり替わってしまい、働く意義を見出せず何もする気が起きなくなってしまうということ。

エ 時間の節約に成功した者が、他者とかかわる時間を減らしたことで、自分を取り巻く世界に対する関心が薄れていった結果、親しい人間との関係までも失ってしまい、頼れる人が誰もいない虚しさを味わうようになるということ。

オ 時間の節約に成功した者が、無駄な人生を送るべきでないと考え、寝る間も惜しんで努力し勝ち続けた結果、その成功体験に自信を得て、他者に対しても自分と同じような時間を過ごすことを押し付けてしまふようになるということ。

問七——線(6)「誰もが貪しい時間を生きる世界」とありますが、そのような世界にならないようにするためには、どのようにするべきだと筆者は述べていますか。五十一字以上七十字以内で説明しなさい。

(問題は以上です)



※らんには記入しないこと



2

